学校名： 県立座間支援学校

令和５年度　学校評価計画書（目標設定・実施結果）

	視点	４年間の目標 （令和２年度策定）	１年間の目標	取　組　の　内　容		校　内　評　価		学校関係者評価 （３月１日実施）	総合評価（３月８日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程・学習指導	○新学習指導要領に基づいてカリキュラムマネジメントを進めることで自立と社会参加を目指す。 ○外部講師の活用や実践報告によって、開かれた教育課程の実施を目指す。	①新学習指導要領を踏まえ教科横断的な視点で教育課程を編成し、授業実践に取り組む。 ②食育の推進、安全な医療的ケアの実施と医療的ケア時の通学支援の充実の工夫を通し、健やかな体を育む教育の推進を図る。 ③ICT 機器を活用した、コミュニケーション支援や学習支援、情報モラル教育を推進する。 ④外部講師を活用することで、地域や社会とのつながりを意識した授業づくりを実施する。	①「単元配列表」を作成し、年間指導計画の全体像の「見える化」を進める。学校教育目標から年間指導計画・個別教育計画が一本の縦軸でつながるよう改善を進める。 ②食育の年間指導計画と各教科の年間計画をつなげ、食事や体づくりの学びを深める。安全な医療的ケアの実施に向け、小委員会を活用し校内での一層の連携・協働を図る。 ③ICT 機器の活用についての研修会を引き続き開催し、情報活用能力の育成についての実践例・好事例について共有する。 ④地域資源の活用や近隣校とのつながりを生かした授業実践を継続し、地域や社会とのつながりを意識した授業づくりを発展させる。	①年間指導計画の見える化を進め、学校教育目標から個別教育計画までをつなげた改善ができたか。 ②食育の授業実践や安全な医療的ケアの実施を行い、健やかな体を育む教育の推進ができたか。 ③ICT 機器を利用した学習支援・情報モラル教育の推進について、アンケート結果に具体的な数値としてあらわれたか。 ④地域や社会とのつながりを意識した授業づくりを行えたか。	①年間指導計画を基にした単元配列表の作成：４/５部門 教員評価：▲29.7% ②食育の実践：５部門 ②学部の視点を基にした係による食育全体計画の作成。 ②医療的ケア児の福祉車両による通学支援を実施できた。 ③総合教育センターへの依頼講座事業を利用し ICT 機器活用研修を実施。ICT 機器を活用した授業改善のためのワークショップや校内の好事例について情報配信を実施。 ④知的本校：営業部・制作部などの役割を生徒が分担し、生徒の店舗訪問、地域の方の来校にて、地域のニーズを聞き取ることができた。 分教室：地域の企業等に協力いただき職場体験の年間実施。	①見える化は進んだが、学びを深められる横断的な学習・活動の配列になっているか検証必要。 ②調理実習、リクエストメニューを考えるなど、調理に関する食育実施にとどまることが多かった。 ③ICT 活用指導力チェックアンケートで「できる」と回答 45%（全国平均 75%） ④作業学習以外での地域や社会とのつながりのある授業展開を行う。	≪保護者アンケート≫ ＩＣＴの活用(－)18.4％(前年比 8.4%↑)、分からない 27.5%(前年比 7.5%↓)校内の様子を見ていただけるようになったことで評価に変化があったかもしれない。 ≪保護者アンケート≫地域社会とのつながりのある授業 (+)58％(前年度比 7%↑) ≪学校運営協議会委員≫役割があると実感できる取り組みが良い。	①年間の行事や指導計画の全体像を見える化し、学部・学年で共有したことで教科等横断的な授業実践を進めることができた。 ②栄養教諭と連携し授業実践し、健康な体作りに食事は大切な要素であることを、生徒それぞれがまとめられた。 ③「実践例・好事例」を共有することは意識の向上につながったが、研修や情報共有を行うだけでは一般化しなかった。 ④知的本校：地域ニーズを意識した活動実施により学ぶ意欲の向上が見られた。 ≪生徒アンケート≫「協働先が求めている製品を提供することができた」82%、「誰かの役に立っている」81%「取り組んでいる活動をたくさんの人に知ってもらいたい」71% 分教室：実際に継続的に地域で体験を積み重ねることで、働く姿勢態度の向上につながった。	①今年度の年間計画について相互的な内容を意識し担当者間で評価し合う。単元配列表を基に年間指導計画を作成していくとともに、個別教育計画の目標につなげる。家庭へも配列一覧表を知らせる。 ②教科等横断的な食育の実施に向け、各教科と食育の年間指導計画を突き合わせ修正を行う。 ③ICT 活用について学校全体で組織的に研究として進める。 ④作業学習だけでなく、学年や教科でも地域や社会とのつながりを意識した授業づくりに取り組んでいく。 ④地域との日常的な交流や外部講師等の地域資源の活用を一層進め、作業学習だけでなく、教科等の学習場面でも地域や社会とのつながりを意識した授業づくりを工夫する。
2	児童生徒指導・支援	○児童生徒一人ひとりの特性や教育的ニーズを適切に把握し、的確な教育実践につなげる。	①児童生徒の実態の背景や教育的ニーズの把握に向け専門職等と連携・協働してアセスメントを実施するとともに、個別教育計画作成や相談機能の充実を図る。 ②チームで協働し、多面的な視点から児童生徒の達成感や自己肯定感を育む教育活動を実践する。	①専門職と連携しアセスメント結果を活かした個別教育計画の作成・評価、授業改善につなげる仕組みづくり、校内の教育相談における機能的な実施の仕組みづくりを行う。 ②日常的・発展的な授業改善を推進するため「輝く日」を設定し、学部・学年を超えた様々な教員のチームで授業づくりを行う。	①実態の背景や教育的ニーズにつなげるアセスメントを実施し、個別教育計画作成や相談機能の充実の仕組みを作ることができたか。 ②チームで協働した教育実践の積み重ねにより児童生徒の達成感や自己肯定感が向上したか。	①専門職と連携して実態把握を行い、実態の背景や教育的ニーズの検討から個別教育計画の作成につなげられた。 ②ケース会の実施:16 ケース ②パーソナルカードの作成により、生徒の微細な動きにまで着眼点をもって授業における支援をする習慣が身についた。 ②「輝く日」を年間計画に設定し、学部・学年単位で、児童生徒の支援検討や授業改善について検討した。	①アセスメントを活用した個別教育計画の作成について各学部の実践があるが、学校全体の仕組みとして確立できていない。 ②パーソナルカードを他の教科にも生かせたかは評価できていない。 ②取り組みに違いがあった。	≪保護者アンケート≫個別教育計画の適切な目標設定(+)97% 子どもの好きなことを一緒に見つけてくれる安心感がある ≪保護者アンケート≫チームで連携した指導(+)87%	①ケース会の内容充実、ケース会が必然的になる仕組み作りが必要である。 ②学部・学年を超えて様々な教員が関わり多面的な視点で話し合うことで、児童生徒を見立てる視野が広がり、より良い支援策が立てられた。一人で集中して活動に取り組める時間が増えたり、手元をよく見て活動に取り組めるようになったことで給食も自食することが増えたりするなど、児童生徒の変容につながった。 ②抽出生徒に対し、共通した指導を実践でき、生徒の達成感や自己肯定感を向上させることができた。	①・個別教育計画の作成におけるアセスメントの活用及び専門職等との連携のための校内の仕組みを構築する。より充実した指導につなげられる書式を検討する。 ・相談機能の充実につながる仕組み作りと、多角的な視点で児童生徒について検討する土壌作りを行う。 ②児童生徒を見立てる力を高め、チームでの実践的な支援が有効且つ好意的に共有される手立ての工夫を通し、児童生徒の「できた」喜びの向上を図る。

3	進路指導・支援	○一人ひとりの社会的自立や生活の充実をめざし、主体的な進路選択や個に応じた進路実現を支援する。	①学部に応じたキャリア発達の目指す姿をおさえ、より豊かな生活について児童生徒の個に応じた気付きや学びを育てる。 ②進路選択や自己実現に必要な情報提供の機会を増やす。	①学部に応じたキャリア発達の目指す児童生徒像に応じて個々に伸ばしたい力、付けたい力を共有し、個に応じた進路指導につなげるとともに、意思決定力の育成を図る。 ②小中学部の保護者、教職員への情報提供の方法や説明会の開催の充実を図る。また移行支援について地域との計画的な協働を行う。	①学部に応じたキャリア発達の目指す児童生徒像、個々の伸ばしたい力の共有を基に個に応じた進路指導につなげることができたか。 ②学校評価保護者・教員アンケート結果に、情報提供の充実が数値としてあらわれたか。	①進路学習ファイルを活用して実習の振り返りを行い、自分の意思で進路選択を行った。 ②小中学部対象の進路懇談会を4回実施（参加者：9人）。また、年金学習会、夏季休業中の進路先見学会実施（福祉16箇所、企業5社）校内職員を対象とした進路学習会も行い、卒後をイメージした支援を考えた。	①肢体不自由教育部門生徒がファイルを有効活用できなかった。 ①自己決定が苦手な生徒へのアプローチ方法についての検討。 ②小中学部保護者の参加率が低い。	≪保護者アンケート≫進路に関する十分な情報提供(+)85％「もっと情報が欲しい。オンライン面談を実施してほしい」	①ファイルの活用により、生徒が自分から進路を検討し直したり、次の目標設定をしたりすることができた。 ①個別教育計画の書式にキャリアパスポートの内容をどのように取り入れるか検討する必要がある。 ②情報提供の場は昨年度より多く設定したが、保護者の満足感の向上にまでは届かなかった。	①自分を振り返り目標設定する場面、自己選択・決定する機会を意図的に設けるなど、進路学習ファイルと学習場面をつなげる。 ②卒業生や卒業生の保護者から直接話を聞ける場を設定するなど進路懇談会の持ち方を検討するとともに、説明会・見学会を積み重ね、保護者と顔の見える関係性構築に努める。
4	地域等との協働	○地域との連携を図り、地域資源を活用した教育活動を推進するとともに、地域貢献する。 ○地域における相談支援センターとしての機能の充実を図り、インクルーシブ教育を進める。	①安全安心な感染症対策を講じ、地域の方々と交流する機会を作る。 ②学校全体で「センター的機能」の充実を図り、研修会や巡回相談等を通し、地域ぐるみのインクルーシブ教育の推進を図る。	①引き続き感染症対策を講じながら、近隣校との交流をはじめ、可能な限り様々な人との関わりや場面の経験ができるよう交流する機会の設定を増やす。 ②HPやTeams、職員会議等で校内外の支援について周知する。巡回相談同行を継続し学校全体でのセンター的機能の充実を図る。	①地域の方々と交流する機会を前年度より増やすことができたか。 ②巡回相談同行後や研修後のアンケート結果に、インクルーシブ教育推進に向けた意識の向上が数値にあらわれたか。	①居住地交流の実施。また事前に出前授業を行い、特別支援学校に興味を持ってもらえた。3校合同研修会では教員間での意見交換ができた。 ①分教室間の直接交流とオンライン交流を実施できた。 ②巡回相談・研修会への同行を5回実施。地域の学校の支援体制の様子を知るとともに、特別支援学校の役割についての意識の向上が感想に表されていた。	①出前授業の際に本人写真などを使用しなかったため、対象児のイメージを交流校児童が持ちにくかった。また、交流校児童の感想を聞けなかった。 ②意識の向上を数値化できなかった。	≪学校運営協議会≫発展的なつながりを継続したい ≪保護者アンケート≫①地域との交流への取り組み(+)60％(前年度比9%↑)②インクルーシブな共生社会の実現への取り組み(+)62％(前年度比13%↑)	①入谷小学校の稲刈りに参加し、刈った稲を渡す・自己紹介するなどふれあうことができた。居住地の小学校で交流学習を行うこともでき、地域資源を活用した様々な学習を数多く行うことができた。 ②月1回校内掲示板を更新し、校内のニーズに合わせた情報や校外支援の様子を発信し汎化を図ることができた。情報発信の継続や係教員を中心とした校外支援の同行の継続により、学校全体のセンター的機能についての理解が進んだ。また巡回相談を通し、地域の支援力向上につながったと近隣校より感想が上がった。	①・出前授業の工夫や継続的な交流・共同学習を実施していく。 ・日々の授業での他学部との交流を進める他、分教室間での授業交流を工夫し、学校全体の一体感を感じられるようにする。 ②掲示板の活用を継続する。また、同行職員の対象を拡大し、学校コンサルテーションの視点をと地域の学校の集団での指導法からの学びを校内に広げる。
5	学校管理・学校運営	○安全で安心な教育環境整備、指導体制整備を進める。 ○生徒と向き合う時間や教材研究の時間を確保するために、組織的な学校運営と校務の効率化を図る。	①安全で安心な活動ができるよう、教室などの教育環境を整備する。 ②防災体制整備計画について地域との連携体制の充実を図る。 ③業務のスリム化や会議方法を工夫し教員の働き方改革を推進する ④不祥事防止や事故防止のための情報共有を進め、意識を高める。	①優先箇所を検討しながら、修理修繕に努める。 ②地域の防災組織からの助言を受け、より組織的な防災組織を構築する。また自治体との合同訓練検討を行う。 ③業務・会議内容の精選、時間設定・事前共有の工夫を行い、目指す児童生徒像の育成につながる働き方改革を推進する。 ④不祥事防止研修を継続し、事故防止についての全体への共有方法の仕組みをつくる。	①安全安心な教育環境整備を進めることができたか。 ②地域と連携し防災体制の見直しを進めることができたか。 ③時間内での会議終了や情報共有の工夫が効率的な働き方につながったか。 ④不祥事・事故防止の情報共有を進め、意識を高められたか。	①校内で行える修繕の実施 ②座間支援学校と座間高校の防災担当が互いの防災訓練を見学した。（小学部児童の搬送、他学部からの搬送応援の様子の見学いただいた）また、福祉機器展を開催し、近隣校・自治会の方にもお越しいただけた。(4名) ③教員アンケート:(＋)80.2％(前年度比8%↑) ③作業進行状態を係内で周知確認するなど、ミスの可能性軽減の工夫を行った。 ④学部・分掌グループで継続的に不祥事防止研修を実施した。	①トイレ、プールの改修までの見通しや代替の方法についての確認 ②近隣と連携し実際的な訓練にしていくためのイメージの共有 ③業務の全体像の把握しにくい、業務の偏りがあると感じる職員が多い。 ④同僚性の向上に課題を感じる職員が多い。	≪保護者アンケート≫安全安心な教育環境整備への取り組み(－)17.4％(前年度比6.4%↑) ・トイレを改修してほしい。 ・プールを使用できるようにして欲しい。 ≪学校運営協議会≫全体的に保護者評価が高い。日頃の教育活動の成果の表れである。	①PTAの活動としてペンキ塗りや花苗植えなど校内環境整備を行った。 ②互いの訓練の様子について意見交換することで、相互連携の基礎作りを行うことができた。 ③Teamsのチャット機能の一層の活用や生徒下校後の短時間の学年会で日常的な情報共有を行うこと、会計年度職員も参加できる時間に学部会を開催するなど情報共有の工夫を行うことができた。行事の在り方の検討や、「WEで語ろう」と題し全職員で話す場づくりを実施し学校運営への参画意識の高まりにつながった。 ④研修の設定により、事故防止に向け注意喚起し合うグループも増えた。	①特別支援教育課、学校施設課との協議を継続し、環境整備実現に努める。 ②防災防犯係も学校運営協議会の防災部会へ出席し、より具体的な連携・情報共有を図る。 ③若手を支える仕組みづくりと業務の可視化、業務スクラップ検討会を組織的に行う。 ③教員が語り合う時間を設定し、互いを認め合う場作りを行う。 ④職員が常に意識を高められるように、定期的に不祥事防止研修を実施する。また、日常的に呼びかけをしていく。